

メバチ 東部太平洋

Bigeye tuna *Thunnus obesus*



管理・関係機関

全米熱帯まぐろ類委員会 (IATTC)

生物学的特性

- 最大体長・体重：尾叉長 2.0 m・200 kg
- 寿命：10～15 歳
- 性成熟年齢：雌は 3 歳
- 産卵期・産卵場：周年、表面水温 24℃以上の海域
- 索餌期・索餌場：温帯域
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：マグロ・カジキ類、サメ類、海産哺乳類

利用・用途

刺身や缶詰原料

漁業の特徴

主要な漁業ははえ縄とまき網であり、1975～1993年のはえ縄による漁獲が大部分を占めていたが、1990年代に入って集魚装置(FAD)を使用したまき網操業が発達すると、まき網の漁獲が急増するとともにはえ縄の漁獲が減少した。まき網漁業について、当初は米国船が多かったが、1970年代の終わり頃からメキシコ、ベネズエラ船が増加するとともに米国船が減少し、1990年代に入るとクアドルやバヌアツ船が増加した。伝統的にイルカ付き操業と素群れ操業が行われてきたが、これらは主としてキハダを漁獲していた。我が国のまき網船は1970年代初頭に操業していたが、現在は出漁していない。1990年代にFAD操業が発達すると、まき網によるメバチの漁獲量が急増した。まき網船の隻数は1961年から2007年の間に125隻から227隻に増加し、それに伴い魚艙容量は3.2万m³から22.5万m³に増加した。2019年には261隻、26.5万m³と、過去最高値を記録した。2020年には新型コロナウイルス感染症の影響で240隻、23.9万m³に急減し、2021年も236隻、25.3万m³であった。まき網総操業数は予備集計値で2019年に33,168操業を記録し、2016年の過去最高値33,211操業よりは若干少ないが、高い値を示した。2020年は27,687操業と急減し、2021年は31,507操業であった。はえ縄漁業について、我が国漁船は当初は缶詰等の加工品原料としてキハダとビンナガを漁獲していたが、1970年代半ばには、刺身需要の増加と冷凍設備の改善によってメバチへと主たる対象魚種を変更した。2000年以降、南北アメリカ沿岸域への出漁が減少し、現在は赤道を挟んだ南北15度の範囲が主な漁場となっている。台湾船は1960年代から出漁しているがビンナガを主対象としており、韓国船は1970年代半ばから操業がある。このほかに、中国、米国、バヌアツ等が漁獲を行っている。

漁獲の動向

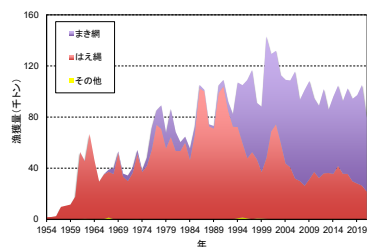
当該海域の漁業国・地域全体の漁獲量は、1975～1993年までは、はえ縄による漁獲が大部分(88%)を占めており、1986年に10万トンに初めて達した。その後、1990年代に入ってFADを使用したまき網操業が発達すると、まき網の漁獲が急増するとともにはえ縄の漁獲が減少した。2000年にピーク(14.3万トン)を記録した後、減少傾向となり、2021年には7.9万トン(予備集計)となった。この年、まき網とはえ縄の割合はまき網が72.7%、はえ縄が27.3%であった。

資源状態

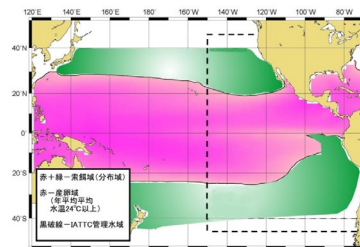
資源評価は2020年にIATTC事務局により行われたが、従来の単一の資源評価モデル結果に基づいて管理方策を提案する方法ではなく、複数(44モデル)の資源評価モデル群の結果を用いて、各モデルの重みを詳細に検討して、統合した結果に基づいて、管理方策を提示する手法に変更された。最大持続生産量(MSY)は10.6万～24.3万トンと推定され、全てのモデルで、2019年の漁獲量より大きかった。漁獲の強さ($F_{2017-2019} / F_{MSY}$)の重み付き平均は1.07であり、暫定目標管理基準値を上回る確率($P(F > F_{MSY})$)は50%、暫定限界管理基準値を下回る確率($P(F > F_{limit})$)は5%であった。産卵資源量レベル(S_{2020} / S_{MSY})の重み付き平均は1.09であり、暫定目標管理基準値を下回る確率($P(S < S_{MSY})$)は53%、暫定限界管理基準値を下回る確率($P(S < S_{limit})$)は6%であった。平均的には、資源量も漁獲の強さも適切なレベル(暫定目標管理基準値)近辺となるものの、悲観的なケースと楽観的なケースに大きく分かれている。資源水準と資源動向について、44個の資源評価モデルの結果に基づいて、1979年もしくは2000年以降2019年までの産卵資源量の平均値と標準偏差をモデルごとに集計し、中位の産卵資源量を平均±1標準偏差の範囲、それより大きい場合、小さい場合をそれぞれ高位、低位と定義した。最新5か年の産卵資源量について、56%が中位、44%が低位とおおよそ二分された。このため、産卵資源量レベルは中位から低位であり、最近5年については、低位となるモデルが増加する傾向もみられるが、資源動向は横ばいと考えられた。

管理方策	
IATTC 事務局と科学諮問委員会からの勧告に基づき、2021年8月の年次会合、10月の再開会合で議論がなされ、メバチ・キハダを対象とした新たな管理方策措置が合意され、2022年から3年間（2022～2024年）に適用される。まき網禁漁日数は72日間の全面禁漁（ただし、メバチの漁獲量に応じて禁漁期間を延長）、沖合特定区での1か月間の禁漁、FAD使用数制限（2022年から2024年にかけて段階的に削減）等の措置が導入されている。また、前回の措置と同様であるが、はえ縄漁業において、国別メバチ漁獲枠が設定された（我が国漁獲枠は32,372トン）。	

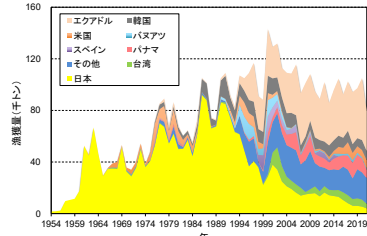
メバチ（東部太平洋）の資源の現況（要約表）	
資源水準	中位～低位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量（最近5年間）	7.9万～10.5万トン 最近（2021）年：7.9万トン 平均：9.6万トン（2017～2021年）
我が国の漁獲量（最近5年間）	0.4万～0.8万トン 最近（2021）年：0.4万トン 平均：0.6万トン（2017～2021年）
管理目標	検討中
資源評価の方法	統合モデル（SS）
資源の状態	$S_{2020} / S_{MSY} = 1.07$ 、 $P(S_{2020} < S_{MSY}) = 0.53$ 、 $P(S_{2020} < S_{limit}) = 0.06$ $F_{2017-2019} / F_{MSY} = 1.07$ 、 $P(F_{2017-2019} > F_{MSY}) = 0.50$ 、 $P(F_{2017-2019} > F_{limit}) = 0.05$
管理措置	以下の措置が2022～2024年に適用 (1) まき網漁業 ①72日間の全面禁漁（ただし、メバチの漁獲量に応じて禁漁期間を延長（※1）） ②沖合特定区での1か月間の禁漁 ③集魚装置（FAD）の使用数制限（※2） (2) はえ縄漁業 国別メバチ漁獲枠の設定（我が国漁獲枠は32,372トン） (※1) 年間の船別メバチ漁獲量が1,200トン以上で10日間の禁漁期間の延長。漁獲量が300トン増加することにより、追加で3日間の禁漁期間の延長。2022年については、2017～2019年平均のメバチ漁獲量が1,200トンを超過していたまき漁船について、一律80日間の禁漁期間。 (※2) 上限数は船の大きさによって異なる。また、今後3年間を通じて段階的に削減することとなっている。例えば魚槽容量1,200m ³ 以上の船の上限数は、2022年400個、2023年340個、2024年340個。
最新の資源評価年	2020年
次回の資源評価年	2024年



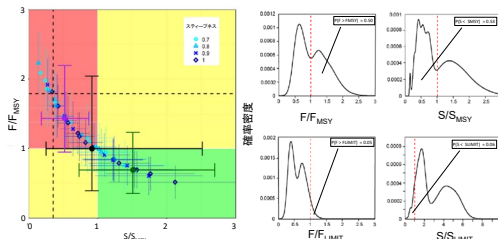
東部太平洋におけるメバチの漁法別漁獲量（1954～2021年）



太平洋におけるメバチの分布域
赤色と緑色を合わせた海域が索餌域（分布域）。赤色が産卵域（年平均表面水温24℃以上）。

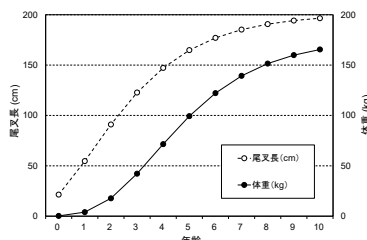


東部太平洋におけるメバチの国・地域別漁獲量（1954～2021年）



東部太平洋におけるメバチの F/F_{MSY} と SB/SB_{MSY} の推移

左図の縦軸はMSYレベルに比した最新年（2017～2019年）の漁獲の強さ。横軸はMSYレベルに比した最新年（2020年初頭）の資源量。紫色、黒色、緑色の丸とバーはそれぞれ、悲観的なケース、全てのケース、楽観的なケースの資源評価指標値（F/F_{MSY}とS/S_{MSY}）の中央値と95%信頼区間。この3つの丸を除いた打点（水色丸、三角、×、菱形）は44個（44モデル分）あり、それぞれ資源評価モデルの設定が異なる。それぞれの色と形はステープネスが0.7、0.8、0.9、1.0を示す。左図の破線は暫定限界管理基準値を示し、親子関係を想定（ステープネス0.75）し、かつ漁業がないと仮定したときの産卵資源量の加入量の50%を得るための産卵資源量。中上図：2017～2019年の漁獲の強さが暫定目標管理基準値を上回る確率は50%。中下図：2020年初頭の資源量が暫定限界管理基準値を上回る確率は5%。右上図：2020年初頭の資源量が暫定目標管理基準値を下回る確率は53%。右下図：2020年初頭の資源量が暫定限界管理基準値を下回る確率は6%。



東部太平洋におけるメバチの成長曲線